

東海道を歩く(3) 箱根峠～興津宿

持田 信廣

相模と伊豆の国境が東海道の最高地点（846m）の箱根峠である。ここから国道一号線は大きくヘアピンカーブを描きながら三島方面へ下っている。旧東海道は一号線から分かれて、芦ノ湖C・Cへの連絡道を入れていくと左側に旧東海道の道標が立っていて、巾1mくらいの細い山道が三島方面に向って一直線に急降下している。

国道一号線と交叉しているあたりが接待茶屋跡で、箱根路を往来する旅人にお茶の接待をする慈善施設で、近くには日本橋から25里目の一里塚や、天正18年（1590）小田原攻めの豊臣秀吉が兜を置いて休憩した甲石がある。さらに下ってまた一号線と交叉するあたりが小田原北条氏の山中城跡である。

山中城跡（国指定史跡）

この城は三代北条氏康により永禄年間（1560年代）小田原城防衛のために築かれた出城で、広さ20万㎡さらに秀吉の小田原攻めに急遽築いた岱崎出丸の遺構も残っている。

天正17年（1589）増築のこの岱崎出丸の完成により、北条方は少なくとも一週間くらいは持ちこたえるよう守兵3千で守りを固めていた。ところが天正18年（1590）3月29日、豊臣軍約5万の精鋭と鉄砲隊により、わずか半日で落城してしまった。北条方の守将・松田康長は討死、応援派遣された玉縄城主・北条氏勝は逃亡した。城跡からの富士山の眺めは素晴らしく、小田原北条氏の築城技術である畝堀、障子堀が鮮明に残っている。

上長坂（かみなり坂）下長坂（こわめし坂）を過ぎ、箱根路の大きな石碑をあとにすると、道の両端に残っている錦田の一里塚や、美しく手入れされた松並木が続いている。初音ガ原の歩道橋を過ぎると三島の町は近い。

三島宿

天武天皇9年（680）駿河国の二郡を割って「伊豆の国」を新設した。この国の国府に選ばれたのが三島で、この国の一ノ宮の三嶋大社も下田の白浜神社から勧請した。また天平13年（741）聖武天皇の勅願により建立した国分寺跡には塔の礎石が残っている。JR駅前には「楽寿園」がある。富士山の溶岩が流れていた所で、一時は小松宮別邸であったが、現在は「国天然・国名勝」になっている。三島宿の町はずれには富士山の雪解け水の湧水で有名な柿田川がある。

三嶋大社 祭神・事代主命・大山祇神

東海道には大きな神社が三つある。宮宿の「熱田神宮」知立宿の「知立神社」それとこの三嶋大社である。本殿は荘厳な権現造りで、伊豆の国の一ノ宮。境内には源頼朝が「源氏」の再興を祈願したことで有名な

頼朝・政子の腰掛石、樹齢 1200 年余・高さ 15 m・根回り 3 mのキンモクセイ（国天然記念物）がある。また宝物館には北条政子奉納の「梅時絵手箱」（国宝）をはじめ多数の重要文化財が納められている。

三島宿をでて国道一号線を渡り直進すると、右手に石の鳥居が見えてくる。「長沢八幡宮」である。拝殿左側に大小の腰掛石を置いた植え込みがある。ここが黄瀬川のほとり、頼朝と義経が対面した記念すべき場所と伝えられる。

長沢八幡宮を過ぎて、黄瀬川を渡る手前に智方神社がある。拝殿の右側に土を盛り上げた塚がある。護良親王の陵という案内板が立っている。親王の陵は鎌倉に比定されている。黄瀬川を渡るとまもなく鶴亀山観音寺があった所に東海山潮音寺がある。本尊は行基作の観音像。この寺には曾我兄弟の仇討ちで有名な富士の裾野の巻狩りの時、工藤祐経に同席した白拍子「かめずる」の塚がある。

沼津宿

沼津駅前の市の中心部が水野忠友が築いた沼津城（もとは三枚橋城）であった。現在の城跡には「沼津兵学校跡」の碑が残っている。

東海道は本丸跡の中央公園と狩野川の間を通っているが、このあたりが川廓町で、ここから江尻（清水）まで船が出ていた。本陣等があった宿場の中心を抜けると浅間神社があり、その斜め向かいに乗運寺がある。天文年間（1532～54）当地は富士川の河口まで荒廃地で、住民は潮害に苦しみ、これを防ぐために松を植えたが根付かず難儀していた。このとき増誉上人は松苗を一本一本経文を唱えながら植え、ようやく千本松原の植林に成功した。村人はその徳をたたえて草庵を建てた。それが乗運寺である。大正 15 年（1926）静岡県は、この千本松原を伐採し工業団地として開発しようとした。この時敢然として反対したのが若山牧水である。このため千本松原は守られた。牧水は近代の増誉上人であり、墓もこの寺にある。千本松原を左に見て歩いていくと六代御前の石塔がある。平維盛の遺子「六代」が鎌倉へ護送される途中、この地で首をはねられるところ文覚上人の命乞いで赦免された。

千本松原からの富士山の眺めは素晴らしいが、つぎの原、吉原、蒲原と続くが、これを三原といい、古代ではこの付近から興津あたりまでの海辺をすべて「田子の浦」と称した。

『田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ
不尽の高嶺に雪は降りける』

山部 赤人

原宿

「駿河には過ぎたものが二つあり。富士のお山に原の白隠」と謳われた白隠禅師が再興した松隠寺は原宿の中央部にある。

松隠寺（臨濟宗）弘安 2 年（1279）天祥西堂が開創。鎌倉円覚寺の末寺だったが、中絶、興津清見寺の大瑞宗育が再興、京都妙心寺派に改めた。宝永 4 年（1707）宝永山の噴火で大破した寺を白隠禅師が再興。白隠は貞享 2 年（1685）に原宿の長沢家に生まれ 15 歳の時この寺で得度した。その後全国を行脚し、享保 2 年（1717）松隠寺の住職になった。師は仏教界の革新に努め、民衆に対する布教活動を行い、特にわかりやすいかなまじりの文章や絵などで教義をひろめた。山門は白隠創建で 108 の煩惱を現した石瓦葺きになっている。境内には岡山藩・池田候から頂いた摺鉢が木の枝にかけられた摺鉢松などがある。また多くの書画が残されている。

原宿から西へ平坦な道が続いている。左手海岸側は沼津から続いている千本松原である。

吉原宿

だるま市で有名な妙法寺を過ぎるとJR吉原駅である。かつてこのあたりに吉原宿があったが、延宝8年(1680)の津波で民家ごとごとく崩れ、1km程北の現在の吉原宿に移った。途中「左富士」の名勝地や「平家越」の石碑が和田川ほとりに立っている。治承4年(1180)10月16日、源頼朝は大軍を率いて鎌倉を出発、箱根足柄峠を越えて10月16日には黄瀬川に進出、さらに富士川の東岸に20万の大軍で陣をかまえた。一方の平氏は平維盛を大将に7万の兵で陣をひいた。ところが10月20日、甲斐源氏の武田信義が秘かに敵陣の後方に廻って攻めようとする、水鳥の大軍が驚いて飛び立った。平家軍は源氏の大軍が攻めて来たと驚き一戦も交えず浮き足立って逃げてしまった。

現在の富士市役所を通過し南下すると富安橋がある。江戸時代、京・大阪より江戸へ毎月3度(2日・12日・24日に大阪を出発)飛脚が出発した。彼等飛脚が幕府に願い出て架けられたのがこの橋で三度橋ともいう。

いよいよ富士川の渡船場に到着するが、その手前に雁堤がある。かつて富士川は幾筋にも分流、氾濫を繰り返していた。郷土・古郷孫太夫重高は富士川の治水工事を計画着手し、子の重政、孫の重年に受け継がれ、50余年の年月をかけて完成、加島五千石といわれた肥沃な地域が生まれた。工法は甲斐の釜無川の築堤に学んで形は雁が群れ飛ぶ姿になっている。また難工事のため人柱を立てた護所神社もある。また富士川の急流を渡る渡船場には「水神の森」がある。現在の富士川は鉄橋で渡るが、対岸を右折したところに京都の豪商・角倉了以の顕彰碑が立っている。彼は京都に掘割(運河)を作り高瀬舟によって市内の交易と水運を盛んにしたが、ここでは慶長12年(1607)徳川家康の命により、角倉は甲州鵜沢からここ岩淵間に舟運を開いた。信州や甲州の年貢米を富士川の急流を下って運び、帰りの上りは7割が塩で、ほかに魚を積んだ舟を水夫たちが綱で引っばって運び上げた。

岩淵には、東海道では有名な一里塚(日本橋から37番目)が道の両側に残っていて榎の大木が枝をひろげている。源義経の硯水の碑や浄瑠璃姫の碑を訪れ、さらに進むとやがて蒲原宿の東の木戸に着く。

蒲原宿

「蒲」という水草が一面に生い茂っていたことから名付けられた。蒲原宿東木戸の手前、日本橋から38番目の一里塚の右側民家の間の小道を入った小高い丘の上の森の中に、永禄12年(1569)12月、武田信玄・勝頼に攻め滅ばされた、蒲原城主・北条新三郎綱重の墓がある。城は今川氏の重要な支城であったが、同氏が衰退すると北条氏の属城になっていた。しかし蒲原宿を有名にしたのは、東海道の宿場を描いた、歌川広重の版画「蒲原夜の雪」である。天保3年(1832)広重は幕府の御馬献進の行列に随行、ほとんど雪の降ったことのない蒲原宿に雪を降らせ、大和絵とは異なった遠近法を自由に活用した風景に描き、保永堂から発売して好評を博した。古い土蔵や家並みの中程に、広重はここで描いたというスポットが示されていた。本陣前の建物は江戸時代の旅籠で、当時の欄干が残っている。宿場はずれの和歌宮神社は、織田信長を接待するため徳川家康が建てた御殿の跡といわれ、御祭神は山部赤人、木花之開耶姫。上方見付を過ぎると、かつて製塩で栄えた瓦葺きの大家根の家並みが続き、東名高速道をくぐりぬけると間もなく由比宿である。

由比宿

由比の名称は農漁村で部落の人たちが労働力を提供し合って一つになる結(団結の結)からきた言葉。「お

七里役所」の跡を過ぎると由比本陣の大きな門や板塀がせまってくる。門を入ると東海道・広重美術館がある。本陣の真向かいには慶安4年（1651）7月、幕府転覆を企てた首謀者・由比正雪の生家（正雪紺屋）がある。現在の建物は200年前に建てられたもの。続いて明治の郵便局、問屋場等が続いているが、なんといっても有名なのは、ここ駿河湾で獲れる「桜えび」である。

一号線を跨いで日本武尊伝説の鞍佐里神社のある「間の宿」には、千本格子やナマコ壁の家が続き、東海道の難所であった「薩埵峠」への登り口に続く。この登り口には富士の眺めを楽しんだ文人墨客が利用した「望獄亭」が残っている。明治元年（1868）3月7日、幕臣の精鋭隊長・山岡鉄太郎は薩埵峠で官軍に遭遇追われ引き返し、この「望獄亭」にひそみ、海岸側の蔵座敷で漁師に変装、隠し階段から海岸に脱出、舟で駿府に入り、3月9日には進出していた西郷吉之助に勝海舟の書状を取次ぐことに成功、江戸城無血開城の基を作った。

富士山の絶景ポイント「薩埵峠」を過ぎ、のどかな山村風景の中を下っていくと興津川に出る。江戸時代はこの川も橋が架けられてなく徒渉であった。現在は下手の鉄橋を渡りしばらく行くと大きな鳥居が右手に見えてくる。北九州の「宗像神社」を勧請したもので神社の森は女体の森といって近隣漁師が海から帰る時の目標の森となっていた。さらに街道を行くと「身延山道」の入口があり「南無妙法蓮華経」の高さ3mの髭題目や「是より甲州身延山へ道有13里也」等の石柱が立っている。

興津宿

倭名鈔には息津、奥津などと書かれた古い宿である。しかし本陣2ヶ所は石柱が立てられているだけ、オリバー・スタットラーの「日本の歴史の宿」で紹介された脇本陣・水口屋は民間企業の研修センターになっている。宿場の西外れ近くの丘の上に清見寺の伽藍が見えてくる。

清見寺（臨済宗）津令時代に「清見ヶ関」があった所。天武天皇の時、鎮護の関寺として創建。「枕草子」にも清見ヶ関の名前が見える。この寺には利生塔をはじめ、徳川家康の手習の間が残されており、鎌倉期の梵鐘や江戸時代に作られた五百羅漢の石像など見落とせない文化財が多い。

清見寺から西へ300mほど行くと、西園寺公望の「坐漁荘」が復元されていた。